

安政元年（ペリー来航の翌年）1月、
斉彬は時局の重大さを憂いながら、
江戸出府の途についた。

この時、西郷は初めて中御小姓に加えられ、
数百人の供廻りの中にいた。
斉彬の取り計らいであった。

行列が鹿児島城下外れの水上坂で休憩した折り
「この供廻りの中に西郷吉兵衛と申す者がおるはず。
いづれに在るか」
斉彬は供廻りの者に声を掛けた。

斉彬、西郷の出会いである。

憧れていた藩主に直接声をかけられた西郷の感動は、
どれほどのものだっただろう。
斉彬は、瞬時にこれはものになる、と感じたのであろう。

その後すぐ、西郷は江戸詰めとされ、
藩主と直接会話の可能な庭方役を拝命している。
当時、斉彬は中央政界における活動上、
心から信頼のおける、そして自分の右腕とも左腕ともなる
個人政治秘書のような人物を欲していた。

その白羽の矢が西郷に立ったのである。
彼は、煩雑な手続きを踏むことなく
絶えず身近で会えるようになった西郷を、
家来というより愛弟子のように育てにかかった。
大器が大器を見出し、磨きをかけはじめる。
西郷は斉彬の見込み通りの成長を遂げてゆく。
その頃、斉彬は同じ志を持つ越前候松平春嶽に、こう語っている。

「拙者の家中には多数の若者がいますが、
役に立つものは少のうござる。
ただ、西郷一人は我が藩の宝です。
しかしながら、この者は独立の気性が強うござるので、
拙者でなくては使いこなせませうまい」

久光との関係など、将来の西郷のことを思い合わせると斉彬はそのものズバリを予言している。